



発行日 2008年12月24日 発行人 福島伸悦

編集責任者 浅井宣亮 編集担当 廣澤道秀 館盛寛行

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3 貞昌院内

Tel. 045-843-8852 Fax. 045-843-8864 URL: <http://www.soto-zen.net/>

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.39

ゆめ観音の義捐金の一部をGNDファンド
マット・テイラー氏に委託

CONTENTS

- 巻頭 「世界にとっての禅」..... 大本山總持寺監院 横山 敏明 1
- SZI創立15周年シンポジウム
基調講演「禅信仰と社会的実践」(抄録・後編)..... 駒澤大学名誉教授 奈良 康明 2
- 国内レポート①第10回 ゆめ観音アジアフェスティバル in 大船
ゆめ観音10周年によせて..... 倫勝寺住職 馬場 義実 4
②1本の塔婆で1本の苗木が育つ..... 法政大学 地域研究センター 准教授 宮木いっぺい 7
- 国際布教支援金運用報告 ~受給者レポート ①「坐れば禅の人である」..... 龍雲寺徒弟 山本 正乗 9
②"観音サンガ" in Poland..... 妙義寺徒弟 永見 宏樹 10
- 海外レポート①When Zen Means Too Much..... Joshua Irizarry 12
②ハワイ アイエア真珠山太平寺90周年に参加して..... 長松院住職 篠田 一法 14
- SZI express 会費納入単・動静報告..... 15
- 2009年度 総会・講演会・映画上映会のご案内..... 16

巻 頭

「世界にとっての禅」

よこ やま びん みよう
大本山總持寺監院 横山 敏明

SOTO禅インターナショナルの会報も、はや39号を発刊すること、この間の事務当局のご苦勞に感謝と敬意を表します。

発足当初のことは、存じてはおりませんが、国際布教師あるいは、海

外ご寺院に対する物心両面にわたる後援であったように存じております。

今や、何から何までグローバル化してしまい、その本質が薄らいできているのではないかとの思いがございます。

世界にとっての禅、世界の人にとっての曹洞禅、テレビ画面に写る天気予報の雲の流れの如く、移ろい変わりゆく世界にとっての禅とは、如何にあらねばならないか、重い命題であります。

しかし、現実には、世界のいたるところで日々禅を説き、人々に接し活動している宗侶が黙々と正令を全提しておられます。任期とか近未来の希望等に見むきもせず、只管に願いを実行しておられる浄行にただ敬服しているだけでは、

進歩がないといわねばなりません。

拠り所としての日本曹洞宗、高祖・太祖の教え、全国の宗侶の日常底が彼らの糧となり、勇猛心の支えとなっているか深く反省させられるのであります。

百人が百人ながらの禅ならば宜しいのですが、百人百様の理解、認得であってはならない。云うは易く行うは難しの曹洞宗の只管打坐、上仏祖に並坐し下衆生と同坐する不断の欣求、その安らぎと諦めを、言葉の違い、習俗の異なり、暑寒氣候の変化の中で伝えていかねばならないのであります。

恵まれた場所と環境の中での学道で我一人などといっては何にもなりません。鑑真和上や達磨大師の使命感、近くは北海道、ハワイ、世界各地に仏の教えを拡めていった光徳の祖師方はいつひかなる場合においても、決して忘れてはならず実参実究しなければならないのであります。

最近海外ご寺院の皆さまから總持寺祖院震災復興の為に多額の浄財をいただき、驚きと共に感謝の念を深めました。同学諸兄弟の不惜身命底と共にあらんことを念じております。

SZI創立15周年シンポジウム（2008年6月19日開催）

基調講演「禅信仰と社会的実践」（抄録・後編）

駒澤大学名誉教授 奈良康明

3. 現代の教団の社会への取り組み～新しい僧侶像

話が脇道にそれるかもしれませんが、以前人権関係の方と議論をしておりました折に、その方が、道元禅師のこの例を引かれておっしゃいました。「道元禅師も言われているではないか。自未得度先度他、自らを悟りに向かわせる以前に、他人を救わなければならない。だから、仏教の出家者、僧侶は必ずや100%他を救う、すなわち、社会的事業に邁進しなければならない。」と。こういう理解で、私と議論されたことがございます。

しかし、自未得度先度他というのは、必ずしも他人に社会的利益を与えるということにはなっておりません。といっても、それを否定はされておられません。ですから、道元禅師は布施を初めとする社会的行為をも、菩提心の働きだというのはのですが、道元禅師におきましては、悟り・菩提というものを求めて、厳しく修行して生きていくことが、仏道を行ずる事である。それが他ならぬ利他行、自利利他両方に繋がることであります。相対的な意味の利他行というよりは、そうした信仰者として生きていく。ある意味では、仏教の言葉で一箇半箇の説法などという言葉がございます。ひとりひとりの修行者が、社会的に何かするのではなく身の回りから地道なことで自分の生活の中から影響を与えながら、他人を教化して仏道に入れていく。そうした利他行というものもあるわけです。同時に、積極的に社会的な活動に飛び込んでいくのも、また利他行。道元禅師はどちらでなければならない、ということはおっしゃっていない。

そうしたものを下にあって支えるものとして、自未得度先度他というひとつの修行を教えてください。ですから、信仰というものを深める、慈悲心というものを深めていく、そして仏法に誠実に、そして信仰者としての自己に誠実に生きている限り、禅の人間として主体的な生き方は完結していると私は考えております。

* 出家教団の揺らぎ

と申し上げながら、また話が戻ります。歴史的には、禅の伝承は社会的な方への動きが非常に希薄であったことは、否定できません。そして、現在の私どもにどんな問題があるかと申しますと、浄土真宗は除きますが、曹洞宗をはじめ日本の宗教教団は出家教団を標榜しております。在家の信者さん方には関係のない問題かもしれませんが、しかし、私ども教団の内部にいる人間にとりましては問題です。出家教団を標榜する教団に属する僧侶でありながら、現実の生活は決して出家ではありません。出家というのは、インドではもっと厳しく、家を出るということは、文字通り、屋根のあるところで寝ないことが沙門、出家でありました。完全に社会を出た人であります。中国、日本においては、そんなことはありません。でも、社会的には坊さんは、社会を出た人である。社会には直接関わっていない

のだという、一般的理解があります。

* 現代の僧侶～社会内的存在

しかし現代となりますと、そのままでは通用しないだろうと思います。私どもは僧侶、出家者といいつながら結婚しておりますし、屋根のあるところに寝ているのは当然のこととして、世俗の生活をしているわけです。そうなりますと、現代の僧侶とはなんなのだと、現代の出家者とはなんなのだと、現代の出家制ということが問われなければならない。実はこの問題に関しましては、曹洞宗の総合仏教センターで「現代における出家とは何か」ということを主たるテーマとしながら、総合研究を続けております。3月にその成果が出ました。皆様もそれをお読みになる機会があるかと思います。

現代の僧侶というものは社会内存在であるということはどうしても無視できない。今日の社会状況は、脱俗、社会から出た宗教者の存在を許しません。私たちは僧侶としても、教団という立場においても、社会内存在であるとはっきりしております。そして、その生活の有り様は、世俗的生活であります。新しい出家の意味を模索しなければなりません。社会内存在であるだけに、宗教者として社会に対して、それなりの責任があります。昔のインドとか、歴史的な中国、かつての日本では、お坊さんは社会を出た人でありますから、お坊さんの社会的責任を問うなどということは問われませんでした。

しかし現代では、そうした意味の脱社会の坊さんではありません。私どもは、宗教者としての、仏教者、禅者としての社会的責任は如何と問われなければならない、そして問われている問題であろうと思います。そうした時、個人的救済だけで良いのかということが問題となります。お釈迦様以来、仏教の伝承というのは、どちらかというと人々の個人的な悩みに対応してきました。非常に大きな救いを与えてきました。そして、今後ともその救いというものは続けていかなければなりません。それと同時に、そうした歴史的伝承というものは、釈尊の宗教信仰というものは老病死という個人の自我に関わる、「はからいセルフ」に関わる問題であるだけに、個人の問題に大きく関わってくるということは、無理無いところでしょう。

だが同時に、現実には社会を出た人であるということから、あまり社会的に関わらないで済んできたということもあります。しかし、今日の私どもは、社会内僧侶というものの在り方を考えたときに、今後の僧侶の在り方、仏教教団の在り方というものを考えたときに、一つの歴史的認識として、社会に対する働きかけの歴史と、今後の問題を検討し、反省すべきものは反省すべきだろうと思います。教団のレベルでも、個人の僧侶の立場からも社会に対してどう働きかけていくかということを考え、具体的な実践の道を探る必要があると思います。その意味で私達教団の者は、ひたすら坐禅さえしていれば良い、解



脱と個人倫理のみを説いておれば良いのだという、旧来の出家のイメージに隠れることがあってはならない。社会状況への関心を高め、出家に新しい意味と実践を加え、現代化することが要請されています。

繰り返し申し上げますが、仏教そして禅の本義は、内なる自己に向かって、真の自己を問いつける。真実の自己を

実現していくという本義がある。これはもう当然として、押さえなければならぬ。その上に、他者に対しては個人的な心の救済をしていかなければならないと同時に、社会的な関心を持つ。といっても、すべてのことを出来るわけではありません。私達信仰者の一人ひとりが、それぞれの立場において社会に色々な関心を持ちながら、それに対応して生きていく。そうした、社会に対する関心は必要だと思います。

脱線気味になりますが、社会に対する関心といっても、禅の信仰者だから必ずこうだと規定することなどとても出来ません。

私は新聞などで、アフリカで内乱があったり戦乱に巻き込まれて子供達が飢えて栄養失調になっているという記事を読むと、「かわいそうだ、何とかならないかなあ」とは思います。しかし、アフリカに飛んでいこうという気にはなりません。ボンベイで子供が亡くなっている写真を見ると、私はインドを研究してきた者で土地勘もありますから、「ボンベイの町のあの辺か。どうしてこんなことになったのだろう。」と、心はかなり乱れます。それでもインドに飛んでは行きません。ところが、カルカッタで同じような状況がおこれば、「何が出来るか分からないが、現地に行って手伝わなくてはいけないのではないか」となる気がします。私はカルカッタ大学で勉強しました。カルカッタは私が3年半暮らした町だからです。

すると、家族は「父さんおかしいんじゃない。慈悲心には区別があるの？子供がかわいそうなら、どこでも皆同じじゃないの？」と言います。そうではないのです。同じような苦しい状況や悲惨な状況があった場合でも、人間はそれぞれの立場や歴史の中から、自分がどこまで巻き込まれていくかは違ってくるのです。これは致し方ないことです。

ですから、「何をしなければならぬ」ということは無論ありません。それぞれの立場の中から、それぞれに禅仏教のなすべき事柄というものを誠実に考えていく。そうした中で、今まではあまりにも社会的な事柄に目を向けなさすぎた。今後そうしたことを考えていく必要があると思います。

その意味では、曹洞宗がもう10年以上に渡って「人権・平和・環境」の活動を教団として展開してきたことの意味は、充分にあると思います。これは教団主導で始まった運動ですが、一人ひとりの人間の生活の中に内面化されていかなければいけない問題だと思います。同時に、宗学というものの裏付けも必要ではないでしょうか。

*慈悲心は育てるもの

社会的なことに関心を持つということを、少し洒落た言葉で

言う。「慈悲の心を社会に当てはめていく」ことでしょう。マザー・テレサの言葉で「愛の反対は憎しみではない、無関心だ」という、素晴らしい言葉があります。カトリックの方です。「愛」と言いましたが、私達の言葉では「慈悲」でしょう。「慈悲」の反対語は、辞書を引けば「憎悪・憎しみ」です。しかし、現実の社会での反対は「無関心」だろうと思います。隣の人がどんなに苦しんでいようと悲しんでいようと、「私は知らないよ」とバラバラになり心が繋がらなくなる。これが現代の社会とするならば、私達は仏教者として禅の信仰者として、もっと自主的に慈悲の心を持つべきだと思います。

こういう事を言うと嫌われます。大抵「慈悲の心を持ってなんて言われても、おいらそれほどりっばじゃない。その内に勉強してもっと立派になったら、慈悲心が育ってくるから、それまでは勘弁して下さい。」となります。しかしこの考え方は100%間違っております。鈴木大拙さんが「慈悲は誰にでもある。しかし慈悲は自分で育てるものだ」と言いました。最初から百点満点の慈悲などないのです。道元禅師も「智慧慈悲もとより備わる人もいるけれども、備わらない人もいる。学べば得るなり。」と言っておられます。

講習会で慈悲を習ってきて慈悲を行う、のではないのです。現実社会のために尽くしていくという具体的な行為、すなわち慈悲道を行うことによって、育てていくのだと確信しております。寝っ転がって慈悲心を増長させようとしても無理です。

もう一点あえて言うなら、坐禅だけして他に何もしない場合も、慈悲心は育たないと思います。むしろ、社会に慈悲を及ぼしていくときに、坐禅で修行してきた仏法の智慧の心がサポートしていくことになるのです。

かなり以前のことですが、若いお師家さんが曹洞宗の差別問題に対して「こうして差別で色々問題が出てくることは真に残念なことです。坐って坐って坐り抜けば、差別など出てくるはずがない」とおっしゃいました。私は「それは違うのではないですか」と申し上げました。坐禅は宗教的に重要なことですが、万能ではありません。極端な例えですが、坐禅をすればスペイン語がすぐに話せるようになるかといえ、そんなことはありません。差別というものに関心を持ち関わり考え学ぶ、そうすることが差別に対する慈悲心を養成することになります。そうやって初めて、坐り抜いてきた修行者としての生き方が、その慈悲心をどう生かすかということに働き出してくるのであります。

こういう意味では、先に述べた上田さんと町田さんの話では、町田型の方が正解だと私は受け止めております。個人的救済か社会的救済かという二者択一の考え方は正しくないのではないかと思います。双方相関わりながら、道還、つまり閉ざされた道をグルグル回りながら高まっていくものだと思います。



… 国内レポート① …

第10回 ゆめ観音アジアフェスティバル in 大船

ゆめ観音実行委員会

開催日：平成20年9月6日（土） 11:00 - 21:00 神奈川県鎌倉市岡本1-5-3 大船観音寺境内

入場料：500円（献灯代込み）

主催：ゆめ観音実行委員会（大船観音寺・SOTO禅インターナショナル）

後援：鎌倉市・（財）かながわ国際交流財団・（財）全日本仏教会

協力：神奈川県第五教区・即心会 協賛：京急メモリアル・（株）スカイテック

入場者数：1288人 義捐金総額：38万6400円（かながわ民協協力基金・日本赤十字・GND Fundへ寄付）

ゆめ観音10周年によせて

S Z I 会員・神奈川県 倫勝寺住職 ばばぎじつ 馬場義実

1999年に第1回目が開催されてから、大船観音寺のゆめ観音は今年10年の節目を迎えました。開催当日の午前中、早稲田大学のちんどん研究会がチラシをまきながら商店街を回ると、いよいよ今日がゆめ観音の日、と観音さまを見上げる大船の方も少なくないと聞きます。今では鎌倉・大船の初秋のイベントとして定着しているようです。

このたびS Z I、ゆめ観音実行委員会の方から、思いつくままに一文を・・・との依頼がありました。紙面の一部をお借りして、今回中国琵琶のシャオ・ロンさんと共演したことなど、感じたことを記させていただきたいと思います。

私ども大船近隣の曹洞宗神奈川第2宗務所・第5教区寺院は、この数年、若手を中心にゆめ観音の準備や法要の手伝いに参加しています。ステージ最後に行われる萬灯供養の法要なども、大本山總持寺の雲水さん、S Z Iの方々と一緒に随喜させていただいています。そんな流れの中で、今年は曹洞宗の聲明（^{しょうみょう}節付きでお唱えするお経）と、中国琵琶奏者シャオ・ロンさんのコラボレーションをやってみよう、ということになり、9月6日ゆめ観音当日のステージに立たせていただきました。最初のきっかけは、昨年の夏に真鶴の「檜ホール」で、伝統音楽と聲明・ジャズトリオによる癒しの音楽コンサートが行われたことです。私たち第5教区の若手有志も聲明で参加いたしました。そのコンサートのオープニングで名うての天台聲明と共演させて頂くために本気で練習したことや、満点とはいかないまでも思いがけなく素晴らしいハーモニーが醸し出されたことなどから、もう少し聲明を発表する機会ももちたいと考えていました。そんなところへゆめ観音でのシャオ・ロンさんとの

共演がもちかけられ、即座にお受けすることとなりました。シャオ・ロンさんもまた檜ホールでのコンサートに参加しており、以前に共演した天台宗の聲明とは声質の違う、曹洞宗聲明と共演してみたいと思っていたとのこと。観音さまの取り持ちか、お互いの想いがうまく引き合った形で今回の共演は決まりました。小柄な方ですが、中国琵琶界の至宝といわれるだけあって、テクニックはもちろん琵琶をもったときの存在感はすごいものです。



実は拙寺でも演奏会をしていただき、シャオ・ロンさんとは親しくさせていただいていますが、一緒にステージに立つとなるとこれは話が違ってきます。海外でも絶賛を博している、そんなすごい人と一緒にステージに立てるなんて、これっきりかもしれません。そう思うと、緊張と同時に様々な期待に胸が踊り高鳴る感じがしました。打ち合わせを兼ねた練習会を経て、どのようなステージにするか計画を煮詰め、同時に、檜ホールに出演したメンバーに新しく数人を加えた教区の練習会も幾度となく行い、演目を決めていきます。喉をいたわり、また呻吟し、今は亡き声明の師の録音テープを聞いては涙して練習を重ねること2ヵ月あまり。お盆の疲れが声に出ぬよう気を配って、ようやく当日を迎えました。



ゆめ観音でお唱えした聲明は、次の3種類です。

「洒水の偈」^{しゃすい}「梵唄」^{ぼんぱい}「散華の偈」^{さんげ}

前後と中間に、シャオ・ロンさんがこれらの聲明に触発されて作曲した琵琶の曲が入ります。ソロで弾いた緩急自在なその調べは、花びらが風に舞うような雰囲気のスばらしい曲でした。「洒水の偈」と「梵唄」は拙僧が一人で唱えさせていただき、また、「散華の偈」では教区有志だけでなく、当日参加していただいた仏教情報センターの各宗派の方丈様、SZIのご寺院様にもご協力をいただいて、お唱えだけでなく観客の方々を取り巻く形で散華をしていただきました。観音様に向かってお唱えしていた私にはわからなかったのですが、何百枚もの散華の花びらがまかれ始めたときは、歓声が上がって皆さんそれは嬉しそうだったとのこと。夜の淡い光の中で、きっとすばらしい光景だったことと思います。

ゆめ観音では1200人以上の方が大船の急な参道を登り、さらに階段を上って観音様に会いにこられました。凄いことだなあ、と感嘆せずにはおれません。アジアの演舞等を見たいという人だけではなく、観音さまの前で祈りを捧げたいという方が少しずつ増えているのかな、とも感じました。そういった方々の心の受け止め場所としてのゆめ観音の意義は、大きいものがあると思います。また、今年は最後まで帰らず残ってくれた人がとても多かったようです。新聞、ラジオなどメディアによる告知だけでなく、キャンドルナイトなどのプレイベントも効果が大きかったでしょう。主要スタッフのかたがたの地道な努力が実を結びつつあるのを感じます。しかし一方で、関わる人が多くなり規模もどんどん大きくなった結果、連絡系統の効率化など反省すべき点も少しずつ出てきたように思います。行事の繰り返しから来る「慣れ」にもまた、これから注意しなければなりません。

最後になりましたが、これだけ多くの人に来て、しかも事故も無く円満に終了できるということは、綿密な計画のたまものと思います。半年以上にわたって準備を続けてこられた実行委員会の方々の努力と粘り強さに、心から敬意を表します。お手伝いいただいた多くの方がた、学生の皆さんや大船の雲水さん、寺務所の方々にも御礼申し上げます。有難うございました。世界の平和を願って建立された、大船観音寺の白衣観音様。その観音様の庇護のもと、ゆめ観音がこれからもアジアの祈りを世界中に発信し続けることを祈念いたしております。





大導師 横山監院 侍者 谷津
納経師 福島伸悦 維那 亀野哲也
副堂 馬場義実 堂行 梅田良光
引磬 (甲) 黒田博志 引磬 (乙) 廣澤道秀
両班 細川正善 岩波弘道 石田征史 北見秀明 関水俊道
尾崎正善 北尾康樹 竹内信之 成田智信 (浄土真)
殿行 関水博道 太田賢孝
供頭 近藤一崇 簗保雄 小金山 矢萩 田中
散華 掘見(臨濟) 榎本(浄土) 勝尾(真宗大谷) 鈴木(曹洞)
安孫子(浄土) 仏光山寺(台湾)
法要解説 梅田保彦
舞台 山本雅彦

6

… 国内レポート② …

1本の塔婆で1本の苗木が育つ

GNC Japan 代表・法政大学 地域研究センター 准教授 宮木 いっぺい

■はじめに

皆様、はじめまして。GNC Japan 代表の宮木いっぺいと申します。このたびは、「塔婆供養で植林支援プロジェクト」でのご支援いただき、SOTO禅インターナショナルの皆様、及び寺院の皆様に、心より感謝申し上げます。

SOTO禅インターナショナルの皆様は、2008年創立15周年記念事業の一つとして「塔婆供養で植林支援プロジェクト」をスタートされました。一人ひとりができることからやっということで全国の寺院様に、「1本の塔婆供養で、1本の樹木が育ちます」と呼びかけ、多くのご賛同を得て、2008年より「GNC 共存の森づくり」を支援して下さることになりました。このたび、お寄せいただきました支援金が苗木2万5千本分を越えたというご連絡をいただき、去る10月7日に私どものオフィスにて、福島伸悦会長、および亀野哲也事務局長のお二人より、植林支援金50万円（25000本植林分）を拝受いたしました。ご支援いただきました支援金でさっそく来年2009年5月に植林を実施する予定でございます。



■皆様との出会い

今からちょうど1年ほど前、SOTO禅インターナショナルの亀野事務局長から1通のメールをいただきました。そこには、「GNC Japanの活動に協力したい、その可能性を知りたい。」というメッセージが綴られていました。GNCのウェブサイトをご覧になり、関心をお寄せいただけたようです。やるべきことは山積していても、資金的に限界があり四苦八苦している（大抵のNPOはそうです）私どもにとって大変ありがたいお話でした。

GNC Japanは今まで、何よりも大切にしていまいりましたのは、「出会い」と「人と人との信頼関係に支えられたつながり」です。実は、GNC (Global Network for Coexistence) という名前は、直訳すると、「共存を目指した地球規模のネットワーク」ということになりますが、このネットワークとは、「信頼関係に支えられたつながり」のことなのです。振り返るとGNCのこれまでのあらゆる活動が偶然とも言える「出会い」からはじまり、その後の「信頼関係」によって発展してまいりました。今回も新しい出会いを大切にしたいと考えました。さっそく年

明け早々に直接皆様にお目にかかり、私どもの活動についてご説明申し上げました。あわせて、皆様のご活動についてもお伺いいたしました。とても、優しい空気が流れていたのを覚えております。そして、現実には今後どのような協力関係が成り立つのか具体的な形を検討することとなり、程なく「塔婆供養で植林支援プロジェクト」が立ち上がりました。今の時代、木を植えることの意義は疑いようもございません。このようなプロジェクトがスタートしたことはこの上ない喜びです。

■モンゴルとの出会い

GNCのメンバーは、はじめ、「地球規模の諸問題を解決するために、日本は、そして日本人はどのような国際貢献ができるのか」を研究する研究会で偶然出会いました。ちょうど私が大学院の博士課程に在籍していた頃です。構成メンバーは、社会人、学生、主婦等様々で、毎回の議論はとても新鮮でした。そのうち机上の勉強だけでなく何か自分たちですぐにでも出来ることはないかという話が盛り上がりました。研究会のメンバーが中心になってNPOを設立しました。1995年のことです。

ちょうどその頃、モンゴルで大火災があり、多くの森林が焼失しモンゴル国民が困っているというニュースを聞きました。それならば、植林に行こう、まずは見てこなければと思いつき、メンバーのうち4人がモンゴルに飛びました。設立の1年後、1996年、今から12年前のことです。そこで、はじめていろいろなことがわかり、その後の「森づくり」をはじめとする様々な活動へとつながってゆくこととなります。このように、実は、「植林」も「モンゴル」も最初はさきわめて偶然の出会いが出発点だったのです。

■モンゴルの魅力とその後

今から12年前にはじめてモンゴルを訪れた時、最も印象的だったのは、行く先々で出会うモンゴルの人々の笑顔の素晴らしさでした。顔全体で笑う、その清々しく屈託のない飛びきりの笑顔、輝く瞳の魅力に、私はすっかりまいてしまったのを覚えています。自然と、その一部である人間や物を慈しんでいる、自然や人間や物の使い捨てではない丸く長い関係がたっぷり残っている、そんな印象を受け、人が本来持っているが



ら最近はずっかり忘れてしまった、生き方についての大切な考え方を、思い出させてくれました。そして、これが未来を拓くために人間に残されたかけがえのない可能性なのではないかと感じました。

しかし、12年たった今、人口270万人の半数近くが首都ウランバートルに集中し、日本の都会の生活と変わらない生活を送る人々が増え、最初に出会った魅力が、笑顔がだいぶ減ってしまったように思うのです。金儲け至上主義が蔓延し、市内の空気は車の排気ガスで汚れ、渋滞でいらした車のクラクションがけたたましく鳴り響いています。木材は新しいビル建設のために次々と切り出され、不法伐採も後を絶ちません。今、世界が直面している、抗いがたい悪い流れがここにも表れているといえます。これはとても残念なことです。

■共存への願い

GNCは、3つの共存 (Coexistence)、①人と人との共存、②自然と人との共存、③過去・現在・未来の共存を願って活動しています。宇宙のはるかかなたにある星を目指しているような抽象的な願いですが、この願いに照らして個々の具体的な活動を行っています。

『木を植えた男』(フレデリック・パーク) というアニメをご存知でしょうか。そこには私どもの願い、基本の姿勢があまるところなく描かれています。ストーリーは、人々が醜い争いの末、立ち去っていった荒れ果てた土地に、ある男が1人黙々と種を蒔き続け、やがて森林が蘇り、人々の幸せが戻るといいます。人間のシンプルだが強い想いと行動が、世界を変える姿がそこにはあります。木を植えるというシンプルな行動から、「共存」の考え方が世界に広がると私どもは信じています。

■GNCの活動

GNCは、具体的には、①人づくり、②森づくり、③公園づくり、④苗畑づくり、の4つの活動を行っています。ここでは、中心的な活動であるはじめの2つについて述べたいと思います。

人づくりは広い意味での教育活動ですが、とりわけ、一緒に学びあうことを大切にしています。毎年、モンゴルで、日本で言うならば、中学生、高校生の年齢の子どもたちを集めてエコ教室を開いています。そこでは、環境に配慮した持続可能な社会をどのようにして作ってゆけるかを、子どもたちと一緒に考え、学びあい、話し合い、そして、先述のアニメ「木を植えた男」を観たり、外に出て一緒に木を植えたりします。一緒に学びあい、木を植えることで、将来のモンゴルを背負っ

てたつ子どもたちが育ってゆきます。実際、数年前に出会った13歳の子どもが今大学生になって日本で留学生として勉強しています。これは本当に夢と楽しみでいっぱいの活動です。

森づくりは、現在のところ、モンゴルの最北部、ロシアの国境近くのセレンゲ県のトジンナルスを中心に行っています。モンゴルといえば草原をイメージされる方が多いかと思いますが、実は、南部は砂漠、中部は草原、ロシア国境方面の北部は森林地帯なのです。この森林地帯が、温暖化の影響、及び、不法伐採や火災などの被害にあい、危機に瀕しています。この森林を再生すること、すなわち森づくりにGNCは取り組んでいます (共存の森づくり)。昨年は、50ヘクタール15万本を植えました。樹種としては原生していたアカマツを主に植えています。2004年にはじめて植えた人差し指大の小さな苗木が、今はすっかり大きく成長しました。年々成長する姿を、1年に1回見ることの喜びは格別です。

しかし、木はただ植えれば良いというものではありません。植えてはいけない土地に無理に植えると、木がポンプとなって水を吸い上げ、かえってその土地を砂漠化へ導いてしまうことがあります。地元の生活用水を奪ってしまい、かえって迷惑をかけてしまうケースもあります。「そのようなことは絶対にしたくない、十分慎重に、本当に必要な場所にだけ木を植えないといけない」ということを肝に銘じています。そのためには、植林をする上での信頼できるパートナーが欠かせません。GNCは、どんな場合も、信頼できるパートナーが見つかったからはじめてプロジェクトを開始します。この場合は、森林再生の専門家、モンゴルにおける第一人者で、誠実で素朴なジャムスランさんとの出会いからスタートしています。ジャムスランさんは森林・動物センターのセンター長。長年に渡って、モンゴルの森林再生一筋に打ち込んできた方です。また、この秋には、モンゴル国立大学に新たなパートナーが見つかりました。こうやって、信頼できるパートナーとともに、これからも植林を続けていきたいと思っています。

■よろしく願いいたします

このたびは、皆様の暖かいご支援をいただき、大変ありがたいと同時に、責任の重さを感じ、身の引き締まる思いでございます。今後も、本当に役立つ国際協力を目指して活動を続けてまいります。どうぞ末永くよろしく願いいたします。

なお、GNC Japan (Global Network for Coexistence) の活動につきまして、詳細は、以下のウェブサイトをご覧ください。 <http://kyouzon-gnc.com/> また、ご質問、お問い合わせ等は、mail@kyouzon-gnc.com へよろしく願いいたします。



… 国際布教支援金運用報告 ～受給者レポート① …

「坐れば坐禅の人である」

山梨県 龍雲寺徒弟 やま もと しょうじょう
山 本 正 乗

この度、静岡県林叟院尊董鈴木老師の御導きを頂き、ポーランドの観音サンガへ参禅させて頂くことが出来ました。私自身、安居中に永平寺より、ヨーロッパに三ヵ月間の研修をさせて頂いておりました。当時は安居中ということもあり、ヨーロッパの禅の姿はとても新鮮に感じられ、自らが如何に凝り固まった考え方をしているのかを顧みる貴重な経験となりました。そして今回は、一人で色々なヨーロッパの道場を巡った前回とは違い、鈴木老師にお供させて頂いたことで、今までと違った視点から学ばせて頂くことが多くありました。

今回お伺いした観音サンガは、ポーランドの首都ワルシャワの近くのウィルガという町の、普段はチベット仏教のキャンプであるという建物を借りて一ヵ月の安居を行っており、その中の摂心の期間に私達は伺いました。こちらの指導者は、鈴木老師のお弟子様である寂照クワン師です。寂照老師はアメリカを中心として衆生を接化されているお方として有名であり、私もお会い出来るのを楽しみにしていました。実際お会いしてみると、非常に細やかで温かであり、多くの人々を導いていらっしゃることに自然と納得させられました。観音サンガの道場は、森の中にいくつもあるバンガローをメンバーが寝泊りの場として利用し、その中の大きなホールのある板張りの建物の中央に仏様を祀り、所狭しと座布団上に坐蒲が並べられており、本堂兼坐禅堂として利用していました。森に鐘や木版の音が響くと、それぞれのバンガローからメンバーが坐禅堂に集まります。寂照老師の家風でしょうか、メンバーは無駄な会話や笑顔を慎み、摂心に専念しようと努めているようでした。興味深い点としては、起床の後、坐禅堂に集まり、

日本からするとかなり速いペースで百八回のお拝をします。これは、寂照老師がポーランドにグループを持つ機縁となった韓国の僧侶が行う行だということです。また滞在中に、ルビンという町にあるベネディクト教会の修道院へも連れて行って頂きました。そこらは時々、観音サンガのメンバー



記念法要には、寂照クワン師を初めてポーランドに招いた韓国曹溪宗の僧侶も参加し、韓国流の諷経を勤めた。

が坐禅の指導に当たっているらしく、板張りの坐禅の部屋、坐蒲、坐布団もあり、修道士さん達も大変温かく迎えて下さいました。百八拝にしろ、修道院での坐禅にしろ、良いと思われるものを宗派や宗教まで超えて取り入れていくというヨーロッパならではののびやかさを改めて実感しました。また以前のヨーロッパ参禅でも感じたことですが、堂頭を中心として数名の古くからのメンバーが、何も無いゼロの状態から、道場を決め、仏具を作り、法衣を用意し、長い年月を掛けて少しずつ根を張っていく訳です。ですから、堂頭とメンバー達の結束も強く、共に同じ思いを持って行じているというのが、人々の修行に対する姿勢からも伝わってきました。

鈴木老師は摂心の提唱中、「坐れば坐禅の人である」とおっしゃいました。今も尚、その言葉が私の中に響いています。『弁道話』に「ここをもて、わづかに一人一時の坐禅なりといへども、諸法とあひ冥し、諸時とまどかに通ずるがゆえに、無尽法界のなかに、去来現に、常恒の仏化道事をなすなり。彼彼ともに一等の同修なり、同証なり。」と示されています。我々はそれぞれに自分の世界を持って生きています。AさんならばAさんとして、BさんならばBさんとして、それぞれに全く違い、百パーセント同じには成り得ません。そのような私達が、銘銘のものを収めて手を



ポーランド観音サンガが80日間の夏安居を修行した坐禅堂。

組み足を組んだ時に、時間や場所を越えて同行同修の「坐禅の人」であるのです。それは決して、なんでもかんでも坐りさえすればいいということとは違うのです。例えどんなに沢山の時間を坐禅に費やそうが、それぞれのものをそこに持ち込んでいたならば、坐って坐らずということになりましょう。そこの所を私に気付かせて下さったのは、鈴木老師のお言葉であり、それ以上にそのお姿、振舞から滲み出るものがあつたからだと感じています。寂照老師、また観音サンガのメンバーと接する鈴木老師は、慈愛に満ちた

お顔で、たまに冗談を言いながら、修行者の輪の中に自然に入って行かれ、提唱も我々がわかるように丁寧にお説き下さいました。そのお姿から自然と、我々は銘銘の持ちものは違えども、「一等の同修」しているのだということが伝わってきて、私もその場に身を置かせて頂けている事にただただ感謝するのみでした。

この度の参禅では、鈴木老師をはじめとする多くの方に御導き頂き、かけがえの無い経験をさせて頂きました。深く感謝申し上げます。有難う御座いました。

… 国際布教支援金運用報告 ～受給者レポート② …

“観音サンガ” in Poland

島根県 妙義寺徒弟 なが み こう じゅ
永 見 宏 樹

観音サンガとは、米国の「ソノマ・マウンテン・禅センター」堂頭である、寂照クワン老師がポーランドで毎年定期的に関われる安居のことです。創立20周年慶讃法要が7月5日に、5日間の摂心とともに行なわれました。今回、クワン老師の師匠にあたる永平寺の鈴木包一単頭老師ご夫妻のほか黒柳博仁国際部主事、山本正乗師に同行させていただきました。

《ある修道士との出会い》

11日間の滞在期間中に一泊二日の日程でワルシャワから車で約5時間のルビンという小さな村にあるベネディクト派の修道院へ単頭老師、クワン老師ほか約10名で訪問する機会をいただきました。道元禅師と同時代の1200年頃に建立されたというその修道院の生活は、厳格な戒律の下で共同生活を営んでおられ、毎日の生活の根幹には祈りと労働があります。そして、特徴的なのが私たちと同じように坐するという行為を実践されていることです。20年前にクワン老師がポーランドの坐禅修行者から定期的に招待を受けてカリフォルニア州から訪問され始めた頃、この修道院の若い修道士のお一人が坐禅の指導を依頼されたことに始まり、その後もクワン老師の弟子のミコワイ師が引き続き指導に当たられています。今では専用の坐禅堂が修道院内に設置されるまでになり、観音サンガとは非常に親しい信頼関係を結んでいると説明されました。

メディテーションと訳される行いは、道元禅師の示される坐禅とは異なる行いといわねばならないはずですが。私の浅はかな経験と学識、僅かな滞在からこのことを語ることはできません。しかし、坐蒲の置かれた道場での“坐る”という行いが一つの手段としてではなく、ここで生活する

修道士に欠かせないものであるというのです。“メディテーションと坐禅”言葉の形の違いを追いかけることをやめ、行いそのものをみたなら、人種、信仰、場所はなくなり、そこには、ただ“坐る人”がいるだけとなるのでしょうか。

この地で心を大きく揺さぶられるご縁をいただきました。歳は80前後にお見受けする一人の修道士が夕食会を終えて各々部屋に戻り始めた頃に私の下へ近づいてこられたのです。その笑顔にきざまれた皺には、ここまで歩んでこられた人生のたくさんの喜びや悲しみが一本一本現されているかのように見えました。寝床に着くことが名残惜しいように会話を始められました。

「私は英語をあまり話せません。その英語で日本から来られたあなたに一ついいたいことがあります。」その言葉にすかさず「私も話せません」と言いかけましたが、変化した老僧の真剣な眼差しに、頼りっきりの黒柳主事さんや正乗さんのおられない状況に戸惑いながらも、今この私に何か大切なことを伝えようとしているんだとハッと感じ取りました。

「あなたもご存知のように、ブッダは2500年前に、イエスは2000年前にこの世に現われました。国や時代が変わればそれぞれ独自の形が出てきます。しかし、時代や場所が変わっても変わることのない原点があることを忘れてはいけません。その原点に気づくことができるか、できないか、ですね……。私たちもあなたたちと同じように坐ります。」

言葉を返すことのできなかった私ですが、その言葉の意味だけでなく、話す声と表情から老僧の深い心底を目の当たりにする思いでした。別れ際に「明朝、一緒にお祈りしましょう。では、おやすみなさい。」再び皺のある笑顔で握手を交わした後、最後に合掌で挨拶をして下さったのです。

短絡的にあらゆる宗教、皆同じと言いたいわけではありません。しかし、老僧のこの言葉からは自分の信じる宗教だけが尊いものだ、他の教えのここは間違っているという“優劣のグループ分け”はありません。私の目には、ここで接した修道士の姿は、他の宗教、国、文化を敬うとともに、カトリック教徒であるかけがえのない自己の姿に誇りをもっているように映ったのです。裏を返せば、自国の文化、自己の宗教を我がこととして知る人だからこそ、他文化、異なる宗教を素直に敬うことができるのでしょう。宗教とは何か、信仰とは何かと疑問を抱えながらも一つ一つ歩んでゆく道のりの中から、より深い信仰へとつながってゆくはずなのです。そして、「信じることに優劣のグループ分けなんてないんだよ」という原点にたちかえった人だからこそ、悩むことなく自然と手を合わす行いができたのではないのでしょうか。

《坐禅をすれば坐禅の人》

安居会場はワルシャワから車で約1時間のところに位置するウィルガというところ。今回の摂心にはポーランド国内を中心に約80名が集まりました。参加する人々は仕事の休みをまとめてとり、参加料を支払います。ポーランド人の99%はカトリックといわれる環境での参加者に“特別に立派な人々”という称賛は私の勝手な思い込みであり、彼らには、“ただ坐りたいから参加する”それが最も大切な理由なのです。

摂心を終えた明るる朝、前夜にそれまでなかった会話や笑顔のある夕食会、安居期間中にこの日の朝だけはゆっくり起きることを許されている、いわゆる「坐禅をしなくてもいい日」とのことでした。しかし、その日の朝、申し合わせたわけでもなく、正乗さんとともに僧堂へ向かいました。中に入ると5、6人がすでに坐っていました。驚いたことに、私たちが一炷坐り終えた頃には堂内の半分ほどの単が埋まっていたのです。その後も僧堂へ向かう人の姿がありました。

この時に感じたことは、サンガの多くの人々の意識の中

には起床時間は遅くとも、坐らないわけにはいかない何かがあるのではないかということでした。その何かとは私たちもそうであったように、何となく誰かが僧堂で待っているような感覚、まさにそれが何とはなしに坐らないわけにはいかない静かに広がる大衆の威神力、坐禅の功德力に思えたのです。

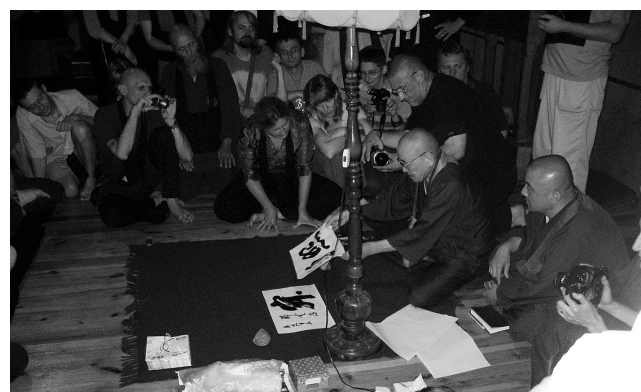
この摂心で強く心に残った単頭老師の提唱されたお言葉があります。“坐禅をすれば坐禅の人”、以前からあった疑問が更に深い疑問へと繋がる一言でした。それは修道院での経験とも重なっていくのです。言葉も人種も格好も異なる人たちとともに坐禅をしても、そこにはただ坐禅の人がいるだけなのです。生きてきた道のり、年齢も職業も坐禅の上には関係ありません。そこに優劣はありません。しかし、ひとたび坐禅をやめれば、ポーランドという異国の地で、言葉の通じないオドオドした私がいるのです。坐禅をする毎日の生活にも、坐禅以外の時間には腹を立てたり、妬んだり、人を蔑む私がいるのです。“無所求の坐禅としてただその時坐ればいい”、“日常生活も坐禅”という耳に入りやすい表現はそれとしても、私の日常を何ら助けてくれない、日常と結びつかない坐禅であることを思い知らされるのです。しかし、坐禅こそが私の生き方の根幹であると信じているのです。この妙な堂々巡りの感覚に襲われていたのです。

道元禅師は弁道話の最後でお示しです。『いづれのところか仏国土にあらざらん。このゆゑに、仏祖の道を流通せん、かならずしもところをえらび、縁をまつべきにあらず、ただ、けふをはじめとおもわんや。』ポーランドで坐ろうと島根で坐ろうと、場所、環境に関わらず、坐禅をしてもオドオドした私は変わりません。しかし、結局のところ私の小さな頭の想いの中でどうこうしたとしても、一日一日、今日この時に“坐禅の人”から離れない、この誓願に生きていくことは確かなことといえるのです。

最後に、寂照クアン老師ご夫妻を始め、ポーランドでご縁をいただいた、謙虚で思いやり深く、いつも些細なことにまでお心遣いを下さった皆様に感謝申し上げます。



ルビンのベネディクト教会に設けられた坐禅堂にて。
山本正乗師(左)と永見宏樹師(右)



20周年を祝い、揮毫される鈴木包一老師(中央)

When Zen Means Too Much

Joshua Irizarry

In the six months since I returned to the United States from Japan, it seems like I have been hearing the word ‘zen’ everywhere. At first, I assumed this was because thinking about Zen is a full-time job for me. Upon reflection, however, I started to realize how much the word has taken on a life of its own in recent years.

Like all languages, English borrows and incorporates words from other languages, but in my experience there is no word as ambiguous to an English speaker as ‘zen.’ Most words that enter English from other languages have a clear point of reference. For example, if you were to ask an American what ‘sombrero’, ‘croissant’, ‘hula’ or ‘kimono’ are, more than likely that person will have a general idea of what you are talking about.

This is not the case with Zen. English-speakers have a sense that they know what Zen is, but if you ask them to define it, most people can only give a series of vague and unsure responses. When I have asked people the question, “What do you think ‘zen’ means?”, I have been given a wide range of responses: ‘calm’, ‘peaceful’, ‘focused’, ‘trancelike’, ‘natural’, ‘simple’, ‘relaxed’, ‘makes you think’, ‘wooden’, ‘modern’, ‘spiritual’, and ‘vegetarian’. While these are certainly pleasant associations, these responses conceal the fact that the person does not have a clear idea of what Zen is.

Making things more confusing is the fact that the word Zen is no longer used only as a proper noun (as in Zen Buddhism or a Zen temple). In common English usage, it is also used as a general noun (an experience of ‘zen’), an adjective (‘a zen feeling’), an adverb (‘zen living’), and even as a verb (‘to zen’ or ‘zenning out’). In fact, this shift in the ways the word ‘zen’ is used in everyday conversation is taking place not only in American English, but also in other countries and languages as well.

In the United States, at least, much of this ambiguity comes from the paths by which Zen entered American cultural knowledge. The efforts to spread the teachings of Zen

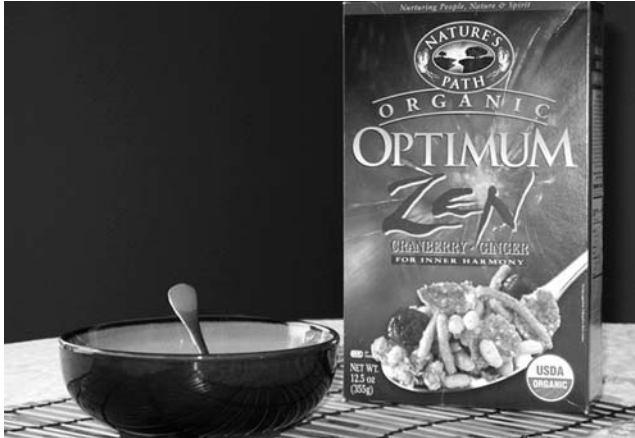
to Europe and the Americas began as early as 1896, but it was not until after the War that interest in Zen began to spread in the United States. At first, Zen was picked up by poets and rebels who were looking to challenge the rules and authority of American society, government, and religion. For these people, Zen was interpreted as lessons in freedom and a way of challenging “the Establishment.” Over the course of the 1960s and 1970s, these themes would reverberate throughout the United States and the world, inspiring a surge in interest in Asian religions, and among them, Zen Buddhism.

It is somewhat ironic that as Americans became more familiar with the word ‘zen’, they actually became less familiar with the history, teachings and ideals that Zen originally represented. As the 1970s wore on, the word ‘zen’ became detached from Zen Buddhism, and became entangled with other aspects of the new spirituality movement in America. Eventually, ‘zen’ came to be a shorthand for a lifestyle that included organic food, yoga, living with nature, and freedom from the stress of the everyday world. These associations continue to this day.

At the same time, astute business minds from authors to furniture makers were learning that ‘zen’ was a word that sells. A favorite example of mine is to compare Eugen Herrigel’s *Zen in the Art of Archery* with Robert Pirsig’s *Zen and the Art of Motorcycle Maintenance*, the two best-selling books on ‘zen’ in any language. People are shocked when I reveal that the only thing they have in common is that they both have absolutely nothing to do with Zen. I am often asked, “Why would the authors use the word ‘zen’ in the title if their book isn’t about Zen?” My answer is simple: you bought it, didn’t you? The power of the word ‘zen’ to sell products also continues to this day.

While thinking about this essay, I did an experiment to see how much ‘zen’ I could reasonably fit into my everyday life in the United States. (Please note that for the following paragraph, each time I use the word ‘zen’, I am





specifically referring to a product that is named ‘zen’ by its manufacturers.)

When I wake up in the morning, I brush my teeth with Zen toothpaste, with water from my Zen sink. I go to the breakfast table, where a box of "Optimum Zen" cereal is already waiting for me. My infant eats in her Zen high chair, while I eat off my Zen dishes. At the bookstore, I can pick up a book on any number of Zen subjects: Zen gardening, Zen home decorating, Zen accounting, even Zen poker. While waiting in line, I can buy a miniature Zen garden kit for my desk to sit next to my Zen fountain. Later that evening, I sit down to watch a drama about a police detective who solves crimes with skills that he developed after reading books on Zen. Just before bed, a popular comedy show ends with a “moment of Zen”, mocking the most ridiculous thing said by a politician or journalist that day. I set my Zen alarm clock, and drift off to sleep on my Zen bed on Zen bedsheets, looking forward to a new Zen day. (Don’t believe me? These can all be found with a quick Internet search.)

These are only several examples of a huge industry of zen-named or inspired consumer products, but this brief list demonstrates how the Zen “brand name” has been co-opted to sell a variety of products, none of which have anything to do with the Zen Buddhism that I have been studying in Japan for years. I was reminded of a legal case I had heard about while researching intellectual property law: in 1982, the Xerox Corporation found itself in court fighting for control of its own name. In the twenty-five years that the Xerox brand had been in existence, the company had become so successful and the brand such a household word that the word “xerox” was becoming a synonym for “photocopy.” Many dictionaries even added “to xerox” to their listings. Their very success put the Xerox Corporation into a difficult position. Clearly, their advertising tactics and business model were working. However, if the word became too widespread, their brand name would fall into the legal category of a “generic word” and the company would lose their trademark. In desperation, the Xerox Corporation ran a series of newspaper advertisements begging people to use the word only to refer to products made by the Xerox company, not the act of photocopying. The advertising campaign saved the company’s trademark, and Xerox was able to hold onto their valuable

name.

While it may be distasteful to look at Zen as a business or a “brand name” – Zen Buddhism is, after all, a religion with millions of adherents and practitioners throughout the world – I think that the Xerox example holds an important lesson for teachers from the Japanese Zen Buddhist sects who wish to spread the message of Zen throughout the world. Most companies would envy the positive international image that Zen enjoys. Indeed, the versatile ways in which the word ‘zen’ is used everyday in languages all over the world may be a sign of one of the most successful advertising campaigns in history. Teachers of Zen must use this popularity with care. The everyday use of ‘zen’ in the United States shows that – consciously or not – Americans are genuinely interested to know more about Zen. However, unless efforts are made to reclaim the Zen brand name, ‘zen’ risks becoming a word that means so many things that it may end up meaning nothing at all.

Joshua Irizarry is a doctoral student in cultural anthropology from the University of Michigan. Since 2004, he has been doing research on Sōtō-shū Daihonzan Sōjiji. He is currently writing his doctoral dissertation on everyday life and practice at Sōjiji.

ジュシュア・イリザリ氏は、ミシガン大学文化人類学大学院博士課程の学生です。2004年から大本山總持寺の修行と日常行持についての博士論文を執筆中です。大本山總持寺の梅花講員、日曜参禅会会員です。大本山總持寺の授戒会も2回修行されています。このたびSOTO禅インターナショナルに寄稿をいただきました。

【要旨】

60～70年代に広まった「ZEN」は、現代のアメリカではあらゆる場面で見かけるようになりました。

作家から企業まで、「ZEN」という言葉のもつ強大なブランド力を利用しています。毎日、世界中で使用されるということは、史上稀なる広告キャンペーンの一つであるとも言えるのです。

これほど溢れている「ZEN」ですが、本来の意味を明確に捕らえたうえで使われている訳ではありません。ブランドということに喩えることが適切かわかりませんが、「ZEN」という言葉が独り歩きしている現状も危惧されることです。

ゼロックス社が「ゼロックス」の商標を取り戻したという事例は、僧侶にとつての「ZEN」に対する重要な教訓であると思います。

「ZEN」のブランド力を取り戻すことを怠ると、海外では「ZEN」は無意味な言葉で終わってしまう危険をも孕んでいます。

ハワイ アイエア真珠山太平寺 90周年に参加して

愛知県 長松院住職 篠田 一法

1903年（明治36年）に曹洞宗の2人の僧侶がハワイに渡って以来、8番目の曹洞宗寺院として1918年（大正7年）に産声を上げたアイエア真珠山太平寺が、90周年を迎えるという機会に同席させていただいた。アイエアという地は、寺院名からもわかるように真珠湾の近くにあり、ホノルルとパールシティという都市に挟まれた場所に位置する小さなコミュニティである。明治時代にハワイに移民した日本人も結婚し、2世、3世が生まれ、心のよりどころ・日本文化の継承・日本語教育などの必要性からアイエア砂糖耕地の中に開創された。このアイエアには曹洞宗と本派本願寺の2カ寺が建てられた。

さて、90周年慶讃法要は、平成20年10月12日（日）、曹洞宗事務庁より宮下陽祐教化部長を導師に迎え、ハワイの国際布教師8名にアシスタントの僧侶2名、日本からは、山下昭文国際課課長、6世 工藤正典師、7世 篠田一法（筆者）、8世 長谷川俊道師、元開教師徒弟の浅山賢正師と各家族、そして北米国際センター主事の南原一貴師が参加、太平寺のメンバーが約200名、ハワイにある曹洞宗寺院のメンバー約120名、合計300名以上の出席者で太平寺の本堂は満席となった。全員の首には赤いレイがかけられ、日本語・ローマ字・英訳で書かれた法要のプログラムブックを手し、90周年記念慶讃法要が始まった。日本の差定と基本的に同じであるが、教団理事長の歓迎の挨拶・各種団体による代表献花献香・バンダナティサラナ（三帰依）・デディケーション（祈りの言葉）・声明などハワイの文化の中で育ててきた差定であった。

法要後、大型バスでワイキキにあるパシフィック・ビーチ・ホテルのボールルームで祝宴が行われた。来賓紹介・祝辞・感謝状等の贈呈など多くのプログラムが用意され、万歳とア

ロハオエを合唱して成功裏のうちに終わった。

1年以上も前から準備をし、“Honor the Past, Cherish the Present, Look to the Future”「過去に敬意をはらい、現在を大事にし、将来に向かって」というスローガンを掲げ、現在の住職、9世 駒形宗二師とともに多くのメンバーが力を合わせ、90周年の事業として、エレベーターの増設、建物の補修、そして、寺院を開放して、地域社会との交流と奉仕のカントリーフェアというお祭りを開催し、メンバーの団結力を高め、ハワイに住む人々に太平寺の必需性を大きくアピールできたことは、次なる100周年に向けて有意義なものとなるであろう。また、現住職は、ホノルル警察チャプレンとして心のケア活動に積極的にかかわっている。とともに宗明太鼓という太鼓グループも指導している。今後の活躍に期待したい。

今回、記念慶讃法要に参加して、私が、15年前に住職をしていた時と明らかに変わったことがある。ハワイにおいて、日本語教育の必要性は、時代の流れとともにいつか無くなるといわれて30年ぐらいたつだろうか。8年前、アイエア太平日本語学校を閉校した。そして、今回の法要にたくさんの老若男女が集い、お寺のいろいろな手伝いをするメンバーが年を取られた中で、若い世代も少しずつお寺に足を運びつつあることだ。今後の問題点は、ハワイにおいても日本においても同じ問題に突き当たる。それは、いかにして仏教徒を増やすか、ということである。日々の生活の中から学ぶのが仏教である。現住職の日常のあり様が、ハワイのメンバーに共感を与え、多くの仏教徒を育む一翼となっていくことは間違いないであろうと感じる慶讃法要であった。



SZI express

会費納入者・創立15周年特別募金納入者・塔婆供養で植林支援協賛者名簿

ありがとうございました。
大切にさせていただきます。

■ 会費納入者ご芳名

2008/8/1 ~ 2008/11/30

(順不同・敬称略)

北海道	定光寺	東京都	信松院	西村和裕
青森県	大乘寺	東京都	長源寺	一適隆章
青森県	保福寺	東京都		後閑美香
秋田県	満友寺	神奈川県		観音寺
岩手県	祇陀寺	神奈川県		善光寺
岩手県	正法寺	神奈川県	曹源寺	橋本大心
宮城県	輪王寺	神奈川県		東光寺
宮城県	柳徳寺	神奈川県		佐藤成生
宮城県	津龍院	神奈川県	龍宝寺	梅田良光
山形県	輪王寺	神奈川県	善谷寺	浅田英世
山形県	田種院	千葉県		興全寺
山形県	清林寺	千葉県		佐藤信嗣
福島県	清水寺	千葉県		石井清純
福島県	恵倫寺	千葉県	永興寺	高木乗正
福島県		千葉県		真光寺
東京都	龍沢寺	茨城県		牛久保真一
東京都	保安寺	栃木県	高德寺	渡辺清徳
東京都		栃木県	瑞光寺	黒田征利
東京都	法清寺	埼玉県	金剛寺	山喜光明
東京都	静勝寺	埼玉県		勝山星悟
東京都		埼玉県	壹鑑寺	田中一稔
東京都	保善寺	埼玉県	見光寺	石塚正道
東京都	宝泉寺	埼玉県	正覚寺	石井早苗
東京都	清巖寺	埼玉県	龍泉寺	柿沼仁法
東京都		埼玉県	東栄寺	大森篤史
東京都	増福寺	群馬県	東善寺	村上泰賢
東京都		群馬県	天宗寺	工藤正典
東京都	立川寺	群馬県		桂昌寺
東京都		群馬県		建明寺
		群馬県	(有)オモロ	山口淳一
		石川県	崇禅寺	三香美成子
		石川県	長久寺	星野邦
		石川県		大乘寺
		富山県		徳城寺
		富山県	全龍寺	館定道
		静岡県	秀源寺	飯島誠之

静岡県	法幢寺	秋田弘隆
静岡県	山王寺	青山嶺雲
愛知県	西光寺	小原智司
愛知県	曹流寺	堀部明宏
三重県		東正寺
京都府	苗秀寺	大谷俊定
広島県	聖光寺	田中哲彦
山口県	福田寺	齊藤大等
山口県	華嚴寺	磯部誠司
愛媛県		瑞心寺
愛媛県	瑞心寺堂長	植崎通元
長崎県		皓台寺
長崎県		天祐寺
長崎県	青眼寺	水町宗典
熊本県	芳證寺	村上和光
大分県	松屋寺	藏山光堂

埼玉県	金剛寺	山喜光明
埼玉県	東栄寺	大森篤史
群馬県	天宗寺	工藤正典
石川県		大乘寺
富山県	全龍寺	館定道
愛知県	西光寺	小原智司
広島県	聖光寺	田中哲彦
長崎県	青眼寺	水町宗典

■ 塔婆供養で植林支援協賛者ご芳名

2008/8/1 ~ 2008/11/30

(順不同・敬称略)

累計 95件 苗木 26,267本分

青森県	大乘寺
岩手県	祇陀寺
宮城県	輪王寺
山形県	輪王寺
山形県	田種院
東京都	静勝寺
東京都	
東京都	清巖寺
神奈川県	
神奈川県	
神奈川県	龍宝寺
神奈川県	善谷寺
千葉県	
千葉県	永興寺
千葉県	
栃木県	高德寺
群馬県	天宗寺
石川県	
富山県	全龍寺
広島県	聖光寺
長崎県	青眼寺

■ 創立15周年特別募金納入者ご芳名

2008/8/1 ~ 2008/11/30

(順不同・敬称略)

北海道	定光寺
岩手県	祇陀寺
山形県	田種院
福島県	清水寺
東京都	清巖寺
東京都	信松院
神奈川県	
神奈川県	龍宝寺
神奈川県	善谷寺
千葉県	
千葉県	
千葉県	
千葉県	
栃木県	高德寺
栃木県	瑞光寺

動 静 報 告

2008年9月1日 ~ 2008年12月31日まで

9月6日	第10回ゆめ観音アジアフェスティバル in 大船	大船観音寺
9月24日	役員会・国際課連絡会議	東京グランドホテル
10月7日	GNCとの会合寄付金寄託	GNC台東事務所
10月19日	かながわの中心でエコをさげぶ!	大船観音寺
11月14日	監院老師拜問	大本山總持寺
11月15日	WFB世界仏教徒会議日本大会	浅草ビューホテル
11月26日	役員会・編集会議	東京グランドホテル
12月9日	国際課との連絡会議	檀信徒会館
12月18日~19日	役員会・忘年会	越後湯沢
12月	会報39号発送作業	事務局
12月22日	キャンドルナイト	道元禅師鎌倉御行顕彰碑
	インターネットにて随時役員会を開催しています。	

編 集 後 記

今回で縁がありまして編集を担当することになり、関係諸師のご協力をいただき発行することができ感謝しております。普段手に入る種々の会報を今まで軽く一読していたわが身を恥ずるばかりですが、これからこの経験を生かしていけるよう努力したいと思ひます。足りないところを御指導いただければ幸甚に存じます。

廣澤道秀 合掌

2009年SOTO禅インターナショナル 総会・講演会・映画上映会・懇親会のご案内

日時・会場 2009年3月2日(月) 東京グランドホテル
13:00～総会(3F 桜の間)
14:30～映画『GATE』上映会(3F 桜の間)
引き続き 講演 マット・テイラー監督(3F 桜の間)
17:00～懇親会(6F パンセ)



『GATE』

監督: マット・テイラー

出演: マーティン・シーン ほか

日本語ナレーション: 松嶋菜々子

主題歌: 「GATE」

小林武史 x 伊藤由奈 x ミハイル・プレトニョフ

猛暑の中、2500kmの行脚をする僧侶たちの姿

アメリカ人被爆者たちの証言

核の専門家による核爆発の脅威

人種や宗教を超えた世界中からの行脚への支援

僧侶たちは、行脚の目的地であるトリニティーサイトへ

いったいどのようにして辿り着けたのか…

ゆめ観音アジアフェスティバルにおける義捐金の一部が核兵器解体基金(GND Fund) マット・テイラー氏に寄託されました。

巻頭の写真は、その時の様子です。

マット・テイラー氏は、映画「GATE」の監督でもあります。

3月2日に予定されている講演会においては、映画上映とともに、平和のメッセージをご講演いただく予定です。

映画の詳細につきましては、SZI会報38号P21 および同封の案内チラシをご覧ください。

上映会ならびに講演会には一般の皆さまの参加も歓迎いたします。つきましては、準備の都合上、同封の葉書に参加者のお名前と人数を記入の上で返送ください。